

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

2024年 11月 25日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 藤 洋作 様

所属部局・研究科 京都大学大学院医学研究科内科学講座 臨床免疫学

職名・学年 助教

氏名 辻 英輝

助成の種類	令和6年度 ・ 国際研究集会発表助成			
研究集会名	2024米国リウマチ学会年次集会			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input type="checkbox"/> 口頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他(
発表題目	(和文) 若年性発症全身性強皮症と成人発症全身強皮症の自己抗体に基づく臨床病型と長期予後の違いに関する研究 (英文) The association of autoantibodies with clinical manifestations and long-term outcomes in comparison between juvenile- and adult-onset systemic sclerosis			
開催場所	アメリカ・ワシントンDC・Walter E. Washington Convention Center			
渡航期間	2024年 11月 15日 ～ 2024年 11月 21日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円		
	使用した助成金額	350,000円		
	返納すべき助成金額	0円		
	助成金の使途内訳	費目	金額(円)	
		航空運賃	268,910	
		宿泊費	242,254	
		滞在費	50,000	
		学会参加費	208,262	
発表資料作成費		30,000		
	以上に助成金を充当			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 助成金を渡航費の一部に使用しました。貴財団に厚く御礼申し上げます。			

成果の概要／辻英輝

令和 6 年度京都大学教育研究振興財団国際研究集会発表助成を頂きました。この助成金は、学会発表資料作成費、研究集会発表に要する旅費全般に使用いたしました。私は米国に渡航するに当たり金銭面の負担の心配があったのですが、この助成金のおかげで、令和 6 年 11 月 15 日から 11 月 19 日に米国、ワシントン D.C.にて米国リウマチ学会が開催した American College of Rheumatology Annual Meeting 2024 (ACR2024、和文：2024 米国リウマチ学会年次集会)に参加し、研究内容をポスター発表することができました。(演題名：(英文) The association of autoantibodies with clinical manifestations and long-term outcomes in comparison between juvenile- and adult-onset systemic sclerosis、(和文) 若年性発症全身性強皮症と成人発症全身強皮症の自己抗体に基づく臨床病型と長期予後の違いに関する研究)。この学会に参加できたことは今後の研究の進展におおきな貢献になりました。

今回出席した ACR2024 は米国を中心として世界中からリウマチ・膠原病・自己免疫疾患に関係する学者や医療関係者が集まる集会です。例年数多くの発表が採択され、網羅する範囲は、リウマチ・膠原病・整形外科領域の疾病の病態解明、新規治療法、新規検査法、臨床疫学研究ならびに免疫学など基礎医学等多岐にわたります。学術集会に参加すると新たな知見を習得することができます。ACR2024 に参加することで私自身に刺激となりました。今回最新知見に触れることができましたので、その知見を京都大学で広めることは医療レベルの向上につながると考えています。また、この集会に出席することで、私の研究を世界に知ってもらうことができ、海外の学者と交流するよい機会となりました。

私は、全身性強皮症に関して研究をしています。今回報告した内容は、若年発症全身性強皮症 (SSc) と成人発症 SSc の比較において、長期予後と臨床的特徴が自己抗体に依存するかどうかを研究したものです。研究結果として、成人 SSc と比較して若年性 SSc ではびまん性皮膚 SSc および抗トポイソメラーゼ I 抗体陽性の影響が強いことが分かりました。一方、限局型 SSc に関連する自己抗体である抗セントロメア抗体陽性は低い頻度でした。また全身性強皮症の重症病態である腎クリーゼは成人例で多く見られ、抗 RNA ポリメラーゼ III 抗体の陽性的中率が高い結果でしたが、若年発症例ではほとんど認められませんでした。高年齢の発症は死亡率と関連していましたが、自己抗体間に有意差はみられませんでした。これまで若年発症例の特徴について成人との比較は本邦からも報告はないため、本研究成果は貴重と思われました。

ACR2024 は全身性強皮症のセッションが多く、全身性強皮症に関してはさかんに議論がなされていました。それゆえ、ACR2024 で発表したことは、世界中の学者・医療関係者に発信できたことでした。今回の研究はヒトのデータを対象としていますが、本邦に限定したものでした。海外と全身性強皮症の自己抗体の種類が異なるため、本邦の結果を海外の結果と比較、議論することは重要であり、ACR2024 で発表する意義があると考えました。今回の研究も、次の step として本邦だけでなく、海外を含めた世界レベルで検証することが望

まれます。ACR2024 に出席するに当たり、我々と同様の解析が可能なデータを持っている海外のグループ、学者と親交を深めることも目的としておりました。実際に会場では欧州の大規模なデータベースを有するグループが多数発表しておりました。ACR2024 で海外の研究者と交流を深めることで、将来的に国際的な共同研究につながると理想的であると考えました。実際、ドイツハンブルグのチームから国際共同研究への登録の話を持ち掛けられましたので、今後の発展性を検討することとなりました。

最後になりますが、ACR2024 に参加するに当たり、米国への渡航費が私にとっては経済的に負担と考えておりました。貴財団からの支援によって、無事集会に参加、発表することができました。貴財団に厚く御礼申し上げます。